「うちはしんどおまへんよつて、お父さんのおやすみまで寢そしまへん。」
「大阪にゐるのとは違うて、旅やさかい、無理せんとくれや。」
「あい、氣遣(づか)ひおまへん。」
お鶴は弟子の文江と同じ心だつた。早く母親を亡(うしな)つて、年毎に老ひの影の濃くなる父の身の廻りを、幾年このかた世話しつゞけて來たのであつたが、かうした藝の上の興奮を今更あの顏に見ようとは、常に冷靜(れいせい)であるだけに思ひもつかぬことだつた。茶を入れながらも、お鶴は父の樣子が氣になつてならなかつた。
「御免下さいまし。師匠、お客樣でございます。」
そこへ、廊下を急ぎ足に來たのは番頭の松吉だつた。松吉は障子を細目に開けて、首だけ座敷へ差し入れた。
「なに、お客樣。——」

文江が訊(たず)ね返した。
「へえ、海老藏さんからのお使ひだと仰しやいまして。」
「えつ。成田屋はんの。……」
それは文枝の聲であつた。
「へえ。」
「それはまア何としたこつちやろ。わてがこゝに居るのを知つてなはるとは。……しかしともかくお待たせしては濟まんよつて、速うこつちへ來てもろておくんなはれ。」
「へえ、かしこまりました。」
番頭はそのまゝ立ち去つたが、直ぐに取つて返した背後から附いて來たのは、かつて大阪で逢つたことのある海老藏の弟の眼玉であつた。
「おゝ、これは眼玉はん。——」

「お師匠さん、お久し振りでござんした。いつも御機嫌で何よりでござんす。」
「あんたも息災で嬉しうおます。さア／＼ずつとこつちやへお這入り。」
「へえ、では少々御免蒙ります。」
さらに文江にも促されて、座敷のまん中へ通つた眼玉は、餘程道を急いで來たのであらう懷中から手拭を出して額から首のあたりをしきりに拭き續けた。
「眼玉はん、親方はんもお達者で結構でおますなア。けふは早速市村座へ行つて見せてもらひましたけんど、わてが御當地へ着きましたのはついきのふのこと、なんで成田屋はんは、わてのこゝにゐることを知りはりましたのやろ。」
「へえ。それにつきまして、海老藏の申しますには、土間の五番目にゐなさるのは、確かに大阪の文枝師匠に違ひはない。いづれ茶屋の者に訊いたら判らうから、お前行つてどこにお泊りか聞いて來い。大阪で何かと御厄介を掛けたお禮のしるしに、ゆる／＼お目に掛つてお話がしたいとかう申しますので、茶屋

の桐屋へまゐりまして、こちらに御滯在のことをお聞き申したのでございます。」
「いや、左樣でおましたか。さすがは成田屋の親方はん。あれほど舞臺で働きながら、數多い見物衆の中からわてを見つけ出しなはるとは——。何さまそれほどの餘裕がなうては、江戸隨一にはなれますまい。文枝つく／＼感服仕りました。」
「これは恐れ入ります。つきましては當芝居もあと僅かで舞ひ納めるでございませうから、それを御待ち下さいまして、一度御迷惑でも深川の住居までお運び願ひ度いと申しますので……。」
「それはどうも御叮嚀に。文枝喜んでお伺ひいたしますと、よろしく傳へておくなはれ。」
「早速の御承引で、親方もさぞかし滿足するでございませう。では、お疲れで

もございませうから、手前はこれで御免蒙ります。」

「折角來やはつたのに、そないに急がんでもようおませう。まアゆつくりお茶など飲んで。……」

「へえ、有難う存じますが、親方が返事を待つて居りますから。……」

眼玉はさう云つて速くも立ち上つた。

「それではどうか成田屋はんに、くれぐ\もよろしう傳へておくなはれ。文枝はけふの芝居を見せてもらうたゞけでも、江戸へ下つた甲斐がおますというてな——。」

さう云つた文枝は我と我が胸が一杯になつて瞼の熱くなるのをさへ覺えた。

三

眼玉が海老藏の口上をもつて、再び宿屋へ文枝を訪れたのは、それから五日

目の市村座が上々吉の景氣のうちに千秋樂になつた、その翌日の午下りであつた。直ぐにお越しをといはれるまゝに、文枝は衣服を改める間ももどかしく、駕籠を連らねて本場の海老藏の住居へ來たのであつたが、さて駕籠が門前に横付けにされ、多くの弟子や女中達に左右から腰を屈めての出迎へ振りに接すると、さすがに文枝は聞きしに勝るその豪勢に、度膽を拔かれて、はツとしずにはゐられなかつた。そして思はず出かゝる驚歎の叫びを手にした扇でやうやく口の中へ押し戻しながら、努めて平靜を裝つて直ぐと一間に通されたものゝ、文枝はかつて覺えたことのない萎縮した氣持に打たれて、どうやら足も疊につかぬ思ひであつた。

「しばらくお待ち下さいまし。ぢきに親方がお目に掛ります。」

眼玉が引つ込むと、直ぐに高島田に結つた女中の手で茶や菓子が運ばれた。

「豪儀なこつちや。」

文枝は煙草盆を引き寄せて腰の煙管を拔きは拔いたが、つい煙草を詰めるのも忘れてあたりを見廻した。檜の香がぷンと鼻へ來る明るい部屋。この部屋を飾つてある器具調度の數々。――永樂通寶の紋を青貝入りで鏤めた料紙箱は、おそらく御贔屓のお大名の老女方から贈られた品であらう。上り藤に大の字を鏤めた書棚は、お旗本の大久保備後守様からの御下賜品か。――背後の床に懸けられたのは、抱一上人が筆になる一軸。

「うむ。」

思はず呻いて庭へ眼を轉じると、遠州好みの數寄を凝らした庭園が縁先から展けて池には白鷺が休み、苔蒸した石燈籠を覆つた山茶花の蔭からは藪鶯の囀りさへ聞えて來た。

「さすがは江戸一番の成田屋はん。いやもう大した住居やあア。」

またしても感嘆の呟きを洩らした文枝は、手近の茶碗を取りあげて、その白

磁の透し繪にしばし見入つてゐたが、ふとおのれに歸ると、突然云ひ知れぬ寂しさが胸に迫るのを覺えて、我にもあらず四邊を見過した。

「これが、河原乞食と云はれる人の住居やろか――」

なにさま國持大名のお下屋敷にも劣らぬ程の大邸宅。如何に江戸隨一の人氣を占めてゐる役者とは云へ、奢り僭上のお叱りをも受けかねまじき結構さ、宏大さ。それに引きかへてこの桂文枝はどうであらう。大阪隨一の落語家と遠い江戸にまで知れてゐる身でありながら、この家の十分の一にも及ばぬ住居に跼蹐して、ひとかどの藝人めかしてゐたことの慚かしさ、情けなさ。――

「井の中の蛙ッてわてのこつちや。藝一方の戰やつたら、どこの誰にも敗戰は取らぬつもりやけど、けふばかりはたしかに負けた。負けをつた。怖しいのは世間の人氣。――やはり落語家は役者の敵やないいふのか。」

思はず灰吹を強く叩いた煙管の音。――

「お招びでございましたか。」
あたふたと立ち現はれたのは、主人の海老藏ではなくて、やはり弟子の眼玉だつた。
「いや、別に、……」
が、御主人はと問ひたげな文枝の顏色を讀んだものか、眼玉は氣の毒さうに頭を下げた。
「大層お待ちなさいまして申譯がございませぬ。實は主人の海老藏、先刻藏前の相模屋さんの旦那から俄かのお使ひがござんして、よんどころなく出掛けましたが、もう程なく歸宅いたしますはず、いましばらくお待ち下さいまして……。」
「では、御贔屓からのお招きで。……」
「へえ、まことに相濟みませぬが、そこは藝人の悲しさ、日頃の一方ならぬ御

贔負に對しましても、そのまゝお斷りも出來ませず、どうぞお腹立ちのないやうにと、くれ〴〵も親方の申し置きでございました。」
「それはどうも氣の利かぬことでおましたな。お忙しいところへ罷り出まして文枝もえらう濟ンまへん。前以つてそれと知つて居りましたら、またの日にお邪魔しましたものを。……」
口では輕く云つたものゝ、文枝の胸中には勃然として憤りが頭を持ち上げて來た。藝と藝との交際に、何の贔負筋に氣兼が要らう。ましてわざ〴〵人を招んで置きながら、相模屋さんも蜂の頭もあるものか。淫な浮氣心を權議の上ッ張りで隱した御殿女中や、金で面を張る札差などに御贔負有難しと下げる頭で、この文枝を見下すつもりか。文枝の藝を蔑む氣か。——
(えゝわ、成田屋がその氣なら。——)
不斷の文枝であつたら蹶然と座を立つて、後をも見ずに歸るところであつた

が、それをぢつと怺へてゐるのは、まだ心の隅に一脈の未練が殘つてゐたからであらう。

「いや、さう仰しやられますまいかと、實は親方もどのくらゐ氣を遣はれたか知れませんので。……海老藏の藝は、かういふところから崩れて行くのだと申しました。……」

「ほう、そのやうに云はしやりましたか。」

「へえ、眞實藝を見て下さる御贔屓は少いものだ。舞臺の成田屋を見て下さるだけで、なぜ世間の御贔屓は滿足してはおくんなさらないかと、親方は始終、そのやうに申してゞございます。」

「うむ、さすがは成田屋はん。そのお氣持があればこそ、これだけの人氣を摑みはつたのでござりませう――。いや、よう判りました。」

眼玉の一言によつて、文枝の心には再び海老藏への思慕の念が波を打ち始めた。――自分を待たせておいて贔屓先へ招ばれて行つた海老藏が、今頃はどんなにやきもきしてゐるだらうと考へると、今は矢鱈に腹を立てたことが却つて慚しくなつて、文枝は日が暮れても待たねばならないと、ひそかに心で決めたのであつた。

四

「いや、これは長い間お待たせしまして、何とも申譯がございません。」

さう云ひながらあたふたと海老藏が戻つて來たのは、かれこれ二時ばかり經つて、師走の陽が早くも西に傾いた時分であつた。

文枝はホッと太い吐息をついた。その顏には若い男が待ちこがれた情婦に會つた時のやうな嬉しさが、あり〳〵と讀まれた。

「これは親方、お久しぶりでおます。いつも御機嫌様で……」

「有難うござんす。その節は何かと親身もおよばぬ御厄介になりましてどんなに助かつたか知れやアいたしません。」
「飛んだことを仰しやいます。何もかも不行届きのことばかり、その御挨拶では却つて氣が引けますさかい、どうぞおいとくんなはれ。」
「しかし大阪の師匠。」
「へえ。」
「いつまで江戸に御逗留でござんすね。」
「いつまでと云やはつて、實はわて大阪を引揚げて、御當地へ移らうかと思ひますのやけんど……。」
「大阪は引揚げるとお云ひなさるか。」
「左樣。……」
「そりやアいけない」と海老藏の言葉は急に冷めたかつた。

「あきまへんと――。」
文枝は眉根に深い八の字を寄せた。
「その通り。――なる程お前さんは大阪一の落語家にやア違ひありますまいが、江戸にやアまた江戸の水が流れて居りますからの。」
「何とお云ひなはる。」
「お氣に觸れたら御免なさい。だが、世の中には井の中の蛙といふたとへのある通り、世界は廣うござんすよ。」
「では大阪一は、江戸一には及ばんと云やはるのか。」
「いや／＼滅相な。海老藏口が縱に裂けても、そんなこたア云やアしません。だが文枝さん、藝人は何と云つてもおのが育つた土地が一番でござんせう。旅の人氣は珍しいうちだけのもの。先年この海老藏も、大阪でさんざん辛い思ひをしましたよ。」

「それでは親方、この桂文枝には、江戸の水は飲み切れないと――。」
「飲み切れるの切れないのと、指圖がましいこたア云ひません。わたしの心持は、藝人の心構へを申したまでのこと。生れた土地に納まつてゐれば、ちつとやそつとの無理も通るし、いやなことも云はず聞かずに濟みませうが、知らねえ土地へ出たとなると、云はずもの世辭愛嬌に頭を下げにやなりますまい。どれ程の名人上手にしてからが、どうで藝は死ぬまでが修行、來年なり一年なり遊んで行きなさらうと云ふのなら、わたしや喜んで御案内もさせませうが、江戸の高座へお乘ンなさることだけはきつぱりお止めなすつた方がよからうと思ひます。」
「成田屋はん。そりやあんた、わてに本心で云やはるのか。」
「そりやアもう、こんなことを本心でなくつて云へるものぢやアござんすまい。それもこれも文枝さん、お前さんの藝が惜しいと思やアこその、わたしの

老婆心からでござんすよ。」
「わての藝が惜しいと。」
「それに相違ないぢやアござんせんか。大阪へ行けば、芝居では成駒屋さん、高座では師匠と、立派に相場はきまつてゐるのを、わざ／＼その相場を江戸で崩して行きなさるにやア當らない話。つまり藝が惜しいといふなアこのことなんで。……」
「折角ながら成田屋はん、その氣遣ひやつたら止めとくんなはれ。」
「何ですと。」
「その氣遣ひやつたら、てんとあきまへんよつて、止めとくんなはれと云ふとりまんのや。桂文枝は、大阪でなうては役に立たんやうな藝の修行はして居りまへん。江戸であろが、越後であろが、どこへ行つても人に後れを取るやうな藝ではおまへんさかい。……」

「さ、それがお前さんの思ひ違ひだといふのさ。成る程桂文枝の藝は、他人に指一本指されるわけのものぢやアござんすまいが、藝が解つてくれる人があつてこそ、はじめて光りもし、重みも出るといふもの。土地の水に合はないとなりやア、どんな立派な藝であらうと、てんから人氣は沸きやアしますまい。——あたしやお前さんを知つてるだけに、ざまア見ろ、大阪の落語家のあの藝は何のざまだと、何にも解らない人達の、無鐵砲な啖呵は聞かせたくない氣がしますのさ。——どうかわたしのこの心持を汲んで、江戸で高座へお出なさることだけは、止めにしておくんなさい。」

「ではどうあつても、わてが江戸に停まることはならぬとお云ひなはるんやな。」

「江戸に停まつちやアいけねえとは申しません。たゞ高座へ出なさることだけは、お前さんの藝にちつとでも瑕を付けたくないと思ふばつかり。——」

「解つた。解りました。——文枝はこれで御免。」

海老藏の心持が果してどこにあるのか汲み分ける餘裕もなく、縺れに縺れ拗れに拗れた桂文枝は、颯とばかりにその座を立ち上ると、驚き止める海老藏の手を振り切つて、後をも見ずに玄關先へと飛び出してしまつた。

草履を突ッ掛けたまゝ夢中で一二丁ばかり走り續けて來た文枝は、ほつとして立停つた。崖の上から突落されでもしたやうに、腹の底は憤りに燃えたまゝ、双眼から止め度ない涙が頰に傳はつた。

「よくも、よくも辱を搔かせをつたな。いつぞやの義理も忘れ腐つて、井の中の蛙とはよういうた。——蛙であつたかないか、今に、今にきつと知らせてやる。——えゝ無念や。藝人は大けな家に住まうて、贅澤三昧の暮らしをするのが能やないぞ。どれ程の人氣があつたかて、人の藝を輕蔑するやうな心掛けやつたら、そりや犬猫も同じこつちや。——うむえゝ。覺えとれ。こないな江戸

にゐてくれと頼まれたかて、誰がゐるものか。――もう辛抱が出けん。今夜、
さうや、今夜のうちに發足せう。

五

もと／＼文枝が江戸へ下つたのは、大阪一のおのれの藝をお膝元の江戸へ移し植ゑて、出來れば身ぐるみ江戸の人間になつてしまひたいとの肚であつたばかりでなく、あの人だけは本當の藝を知つてゝくれると信じてゐた、海老藏にまで大きな失望と憤りとを感じたまゝ、娘のお鶴と弟子の文江とを供に連れて、遙々東海道を大阪指して上らねばならなくなつた物寂しさ。泊りを重ねて柊寺町の住居へ戻つても、文枝はまつたく魂の脱けたやうなその日／＼を送り續けた。

「師匠、なぜそんなにくよ／＼してゐやはります。藝は一生の修行やと、いつ

もわてにいうてなはるやおまへんか。いま一度世間をあッと云はせるやうな、高座を見せておくんなはれや。」

ばつたり高座へ上らなくなつたばかりか、一日中暗い座敷へ閉ぢ籠つて「負けた、負けた」と嘆いてゐる文枝に、師匠思ひの文江が思ひ切つての諫言をすれば、娘のお鶴も同じやうに悄氣切つた樣子を見てはゐられなかつたのであらう、涙さへ浮べて、父を引き立てやうと努めた。

「役者衆は役者衆、落語家は落語家でおますさかい、藝が違へば棲む世界も違ふはず。江戸の成田屋はんがお大名のやうなお屋敷に住みはつて、うちらが曲りくねつた露路裏の風に吹かれてゐたかて、磨かれた藝に甲乙があらうとは思へまへん。」

文枝は木像のやうに固く頷いた。

「うむ、そりやわてもさう思ふとる。だが、大阪一のこの文枝が、遙々江戸ま

で下つて行て、公方様お膝元の水は性に合ふまいと云はれたのでは、所詮わての藝は廢つたも同じことやないか。――えゝからもはやなにも云はんとくれ。」
　またしても口を出る重い溜息は、どこまでも僻み切つた憐れな文枝になつてゐた。
「と云やはりますが、なう師匠、今までの桂文枝はたとへ廢りはつても、これからの文枝はまだ廢つてはゐいしまへん。」
「え、なんやと。」
「そやとも」とお鶴も横合から口を挾んだ。
「いま一度初めから出直すつもりで、新しい藝を工夫しやはるお心に、なんで父様はならしやんせぬ。」
「うむ。――」
「師匠がいま一度工夫を樹てはる覺悟やつたら、大口叩くやうやけど、この文

江も夜の目も寢ずに、きつとお手傳ひいたしますさかい。……」
「……」
「ほんにその通り、もう一度父様も奮發して、見事江戸の人達を見返しておくんなはれ。頼ンます。」
　俯向いて、痩せの目立つた頬を顫はせてゐた文枝の兩眼からは、やがて熱い涙が溢れ落ちた。
「あゝ、よく云うてくれた。忝けない。お前達の云ふ通り、これしきのことで挫けてしまふわてゞはなかつたはずや。魔がさしたとでもいふのであらう。面目ない。」
「そんなら父様、うちらの云ふことを聞き分けて、――」
「うむわても大阪一の藝人ぢや。一工夫、いやそれどころではない。一工夫も三工夫も凝らして、江戸の成田屋をあッと云はせにやならん。」

「師匠、有難うござります。――お鶴はん、あんたも嬉しからう。文江、涙が溢れてなりまへん。」

　それからの文枝は、はたの見る目も必死であつた。文江とお鶴の二人を前に置いて、來る日も來る日も火の出るやうな藝の修行が續けられた。そして再び高座へ現はれた時の土産は道具入りと呼ばれる新味と力に溢れた、今までに類のない噺であつた。

「さすが師匠や。」

「大阪一。」

「江戸のへげたれ、どんなもんや。」

　大阪中の人氣が沸騰して、席は連日連夜割れるほどの大入であつた。

「お鶴はん。わてこんな嬉しいことはおまへん。」

「ほんに涙が溢れます。これもみんな文江さん、あなたのおかげ、うちはこの

通り拜んでゐますぞえ。」

「なに云ひなはる、かうしてひとつ家に住まうて居れば、一人の喜びは二人の喜び、二人の喜びは三人の喜びやないかいな。わては道頓堀の往來が、急に狹う見えて來ました。はゝゝゝ。」

　が、若い二人が手を取り合つての狂喜に引き代へて、不思議なのは文枝だつた。高座を滑るやうに降りると、客の騷ぎもまるで耳に這入らぬかのやうに、すつと我が家に立ち戻つて、日一日と憂ひの色が濃くなつて行つた。

「父樣、どこぞ氣分でも勝れまへんか。」

「……」

「師匠、あの通り世間の人氣はえらいことでござります、はやうさつぱりしやはつて、御酒でも飲んでおくれやす。」

「えゝもう靜かにせんかいな。」

「えッ。」
「わてはな、わては、この大阪に生れたことが口惜しいのや。」
「そりやまた師匠、どうしたわけでござります。」
「えゝか文江、藝を見せうとなら江戸のこつちや。どないに大阪が廣う云うたかて、公方様のお膝元には敵やへん。藝人生れた土地が一番や、と、さすがは海老藏よう云ひくさつた。わて所詮、井の中の蛙云はれても仕方ない藝人や。」
「まア父さん。……」
「廣い江戸へ出たら、成る程わての藝などは、吹けば飛ぶやろ。わしはな、おのれの藝が慚しうなつたんや。落語家などといふものが、どれ程詰らんものか、わてにははつきり判つて來たんや。」
「えゝ情ない。そんな弱い氣に、師匠はなんでなりやはりました。」
「なにもかもあらへん。お鶴も文江も、江戸の市村座の話はよう知つとるやろ。

あの廣い小屋に、割れんばかりに詰つた見物衆、その見物衆の作り出す人氣の嵐はどんなもんや。」
「……」
「それに較べたら、わての出る席亭なんどは、まるで乞食小屋も同様やないか。大阪一の浪華亭も、お櫃の底と較べたい程の大けさや。役者と落語家、海老藏と文枝。――大阪一が江戸随一に負けたかて、こりや不思議はない。わては深川の成田屋で、あないに云ひ張つたのが慚しいわい。――」
そのまゝ男泣きに泣き崩れる文枝を圍んで、若い二人もいつか貰ひ泣きの口惜し涙に濡れてゐた。

六

文枝が高座から去つたのは、それから幾日も經たない後だつた。しかも如月

の冴え返つた寒さが弱り果てた體に障つたものか、淀川堤に櫻が咲かうといふ時分には、もはや二度とは立てない病人になつてゐた。

げつそりと頬の落ちた文枝は、口一文字に結んだまゝ毎日天井を睨めたまゝ暮らした。

弟子の文枝と、娘のお鶴とは片時も枕許を離れずに看護しつゞけたが、何とすかしても藥は一切口にしなかつた。

「師匠。どうぞ藥だけは飲んどくんなはれ。藥飲まんでは、癒る體も癒らしまへんによつて。……」

「何も云はんとけ。わて藝に負けた體を、いつまでもこの娑婆に晒したくはないのや。藥も飲まん。飯も食はん。早う死にたうてならぬ。」

「父さん、そない無理いうても。」

文枝は一滴の水さへ口へ入れやうとしなかつた、

一夜、文枝は暗い行燈の下に重い口を開いた。

「文江。」

「へえ。」

「お鶴。」

「あい。」

「わてが死んだらお前達のせにやならん仕事が二つあるのやが、それをしてくれるか。」

「師匠、わては師匠のためならばどないなことでもしますけんど、何でまた、そないな氣の弱いことを云やはりますねん。」

「いや、氣が弱いのではない。わてはもうあかん。藝人が藝の上で敗衄を取れば、たとへ呼吸はあつても、死んだも同じこつちや。」

「……」

「なア文江、その二つのこと、お前は立派にやつてくれるやらうな。」
「師匠、その二つのこと〻云やはるのはどないなことで。……」
「いや、そりやわての口から出したら、せめても取つた大阪一の名までが廢るんや。な、內のことが一つに外のことが一つ、――お前よう考へて見てくれよ。さうしてこの文枝も、最後はやはり藝人として死なしてもらひたいのや。」
「內と外、內と。……師匠判りました。及ばずながらこの文江、決して師匠の名は汚しまへん。」
「うん、そんなら判つてくれたか。有難い。これでわても安心して、眼が瞑(つぶ)れるといふもんや。」
「父さん。おまへどうぞ氣をしつかり持つて。……」
「師匠、お鶴はんもこないに心配してゐやはるさかい、そない心細いことは云

はんと、速ようもう一度達者になつておくれやつせ。氣がすゝまんなら、高座に上らんでもえゝよつて、わてらが一人歩きの出來るのを樂しみにしてなア。」
が、文枝の能面(のうめん)のやうに固く結んだ口は再び開かれなかつた。
戀猫の軒を渡る足音であらう、窓邊近くをかしましく亂れて行つた。
するとその足音と同時に、お鶴と文枝とは突然雨戸の外に訪れる人聲を聞きつけた。
「今晩は。――もし今晩は。」
「へえ。」
「少々物をお尋ね致しやすが、御當家は落語家の桂文枝さんのお住居でござんすか。」
それは如何にもはつきりした江戸言葉だつた。
「うちは文枝でおますが、何ぞ御用で。――」

「へえ、ちつとばかり師匠にお目に掛つて、申上げてえことがござんしてお訪ねいたしやしたが、師匠は御在宅でござんせうか。」

「へえ。」

そのまゝ不審の眉をひそめながら立上つた文江の眼には、格子戸の外に小さくなつてゐる小意氣な男の影が映つた。

「どうぞこつちへお這入り。」

「ぢやアまツ平御免なすつておくんなせえやし。」

男は遠慮勝ちに格子戸の内へ這入つた。

「どちらから。――」

「さア、どちこちらと申上げる程の者ぢやアござんせんが、實アあつしやア江戸からこの浪花へ用があつてやつてめへりやした。ほんの三下奴でござんす。」

「江戸からと云やはりますか。」

「左様で。……でげすが江戸からめへりやしたと云つても、こちらの師匠にやどうといふ縁故のあるわけぢやアござんせんので。――たゞちつとばかりお預かりした品物があつたもんでげすから、こいつを師匠にお渡ししてえと思ひやして。……」

「品物とお云ひやすと。――」

「これでござんす。」

男は素速くおのが内懐中から黒天鵞絨の紙入を取出すと、ずしりと上り端に置いて小首を垂れた。

「こちらの師匠のお預り物、どうかお受取りなすつておくんなせえやし。」

「おゝこれは。――」

「あんたは。」

「去年の十二月の初め、藏前で師匠からこの紙入を御預りした江戸の男だと、

お傳へなすつておくんなさりや直ぐに判ります。——どうか師匠によろしく云つとくんなせえやし。」

「ちよいと待つとくれやす。」

が、文江がかう云つて奥へ引ッ込まうとしたのと同時に、男はあわてゝ外へ飛び出してゐた。

「おゝ助かつた。これでおいらも漸く重荷をおろしたやうな氣がしたせ。」

男はニヤリと闇に笑つた。

七

雛の節句も過ぎて、江戸の町には漸く上野や向島の花の噂が盛りだつた。

その三月初めに蓋を開けた猿若町の河原崎座の前には、大小の幟が威勢よく打ち續く當り狂言に賑つてゐた。

それは役者揃ひ狂言揃ひもさることながら第一人氣の立つたのは「菅原傳授手習鑑」に於ける海老藏と八代目團十郎との一日代りの武部源藏といふ、親子の競演が江戸人の氣持を煽つたがために外ならなかつた。

「親方、どうでげす、大した人氣ぢやござんせんか。」

幕數も追々進んで、今や「寺小屋」の幕が開かうといふ時、見廻りに來た樂屋頭取が、大入で笑み崩れた相好をそのまゝ海老藏の樂屋を覗くと、折柄源藏の拵へに忙しい海老藏は、しばらく刷毛の手を休めて、じつと鏡の中を見守つた。

「これア頭取、何さま豪勢な人氣でお目出度う。この海老藏も芝居の仕甲斐があるといふものさ。」

「おかげさまで有難い仕合でげす。火事からこつちとかく不入り續きの芝居町へ、こんな夢のやうな人氣が出るたアまつたく不思議でげすが、考へて見りや

なんの不思議もありやアしやせん。みんな親方が車輪にやつておくんなさるおかげで。――太夫元もほく〲物でござんすのさ。」

「さう云はれちやアちと氣が引けるが、何しろこれだけの御最屓を前にして、あだやおろそかな藝をお見せ申したんぢやア、成田屋の役者冥利が盡きやすからのう。」

そこへ合圖の柝が響き渡つた。表の客席からは、わアと人氣のどよめきが高い天井へ吹き上げて、やがて幕の開く氣配が感せられた。

「成田屋ア。」

「橘屋ア。」

魂を奪はれた見物の首が、一齊に龜の子のやうに舞臺に伸びて、玉猿のよだれくりをはじめ手習子一同の上に注がれた。

すると、やがて紫若の扮した松王女房千代の出なのであらう、また一齊に大

和屋アといふ掛け聲が土間に溢れた。

「親方、もう大和屋さんがお出んなりやした。」

弟子の團八がかう云つて部屋暖簾の外から海老藏に傳へた。

「判つた。――そこいらに寅吉はゐねえかの。」

「へえ。」

鐵砲彈のやうに顔を突込んだのは、團十郎の男衆の寅吉だつた。

「何か御用で。――」

「おめへ八代目にさう云つてくんな。けふ芝居が取れると藏前さんに招ばれてゐるから、ちよいとでも顔を出してもらひてえとの。」

「へえ、かしこまりました。」

「それから――」

「へえ。」

「うむいゝや。そいつアあとにしよう。」

「へえ。」

「親方、もうぢき出になりやす。」

今度は海老藏の男衆が知らせて來た。

「よし來た。――ぢやアそろ／＼揚幕へ行くとせうか。」

男衆の揃へた草履を突ッ掛けた海老藏は部屋を出ると四五人の小者を隨へて奈落へと降りて行つた。

揚幕の中には床几の用意がしてあつて、そのまゝ海老藏はその床几に腰をおろした。

舞臺では今や小太郎の寺入りを戸浪に賴んだ千代が、下手へと引ッ込むところであつた。――さすがに慣れた舞臺ではあつたが、海老藏は次第に緊張を覺えた。

「成田屋ア。」

「日本一。」

いづれも揚幕の方へ首を捻ぢ向けた見物の口からは、源藏の出の先觸れのやうに、褒め言葉が投げられた。

正に江戸一番、いやそれよりも日本一の武部源藏の出だつた。盛んに「成田屋ア」を連續してゐた見物も、忽ちのうちに固唾を呑んで花道に見入つた。

と、その途端に、突然土間のかぶり附から、ゲラ／＼ッと笑つた者があつた。

それは如何にも氣の拔けた、人を馬鹿にした笑ひ顏であつた。

（いけない）と海老藏は腹の中で思つた。――

（これアけふの芝居は、事によると壞れるかも知れねえぞ。）

が、花道の歩みを亂しはしなかつた。

「へゝゝゝ、ふゝゝゝゝ。」

「うるせえ百姓ッ。」
　見物はたまりかねたのであらう。いきなり土間の前へ向つて呶鳴りつけた。
が、そんなことは何處を吹く風かとばかりに、突拍子もない笑聲は絶え間なしに續いた。
「默れ、百姓。」
「つまみ出すぞ。」
「叱ッ。」
　しかも他の見物が如何に呶鳴らうと怒らうと、更に動ずる氣色のない土間の客は、言葉として何事も云ふのではなく、たゞゲラゲラ、へゝゝゝと、單調なそのくせ舞臺一ぱいに響き渡るやうな聲を續けるのであつた。
　格子戸を開けて這入つた海老藏は、ずらりと手習子の顔を一瞥して、愈々「おゝいづれを見ても山家育ち」の科白にかゝらうとしたのであつたが、その途端

再び虚を突くやうに投げ込まれたのは、へゝゝゝといふ笑ひ聲であつた。――
　海老藏ははたと科白が咽へ詰るのを覺えた。
　しかも客は男女の二人連れ、いつの間にか土間から這ひ上つたのであらう。二人は猿芝居の猿のやうな恰好をして、舞臺端へ腰をおろしてゐたのであつた。
「お客さん、どうかお靜かに願ひます。」
「そこへお掛けなすつちや芝居が出來ません。」
「構はねえからつまみ出せ。」
「叩き擲ぐれ。」
「へゝゝゝ。」
「はゝゝ。」
　海老藏はじろりと二人を見やつた。その眼にはこれまでに見たことのない悲しみが讀まれた。

「幕だ。」

海老藏は鋭くかう叫んだ。

わッといふ聲が小屋を搖がすばかりに沸き起つた。と同時に見物は總立ちになつて、男女二人の見物目掛けてなだれ寄つた。

「お客樣にお怪我があつちやアならねえ。速くお止め申せ。」

海老藏は源藏の拵へのまゝ舞臺端へ立つて、自ら人々を制した。

更にわッ〳〵と云ふ聲が芝居中に漲り渡つた。

八

悄然とおのが部屋に戻つた海老藏は、源藏の衣裳のまゝ端然と鏡臺の前に坐つてゐた。

「眼玉。」

沈痛な聲が部屋一杯に響いた。

「へえ。――親方、飛んだこッて。……」

「今の芝居を壞した二人を、おめへは誰だか知つてゐるか。」

「田舍者で。……。」

「どこへ大きな眼を付けてるんだ。ありやアおめへ、大阪の文枝の弟子と娘だ。」

「えッ。そんならあいつら二人は。……」

「さうだ。だから手荒なことをしちやアならねえぞ。おれが行くまで井桁屋の二階で、お客樣なみにもてなしとくんだ。」

「とお云ひなすつても親方、あんな惡さをしやアがつた奴を。……」

「いゝからおいらの云ふ通りにするんだ。惡さにや違えねえが、あれでも文枝さんに取つちやア立派な弟子と娘だ。師匠思ひのいゝ弟子だ。粗略にしちやア

ならねえ。」

「へえ。」

「文枝さんの藝は人一倍買つたおいらだけに、人氣の移り變りがどこより激しいこの江戸で、あたら大阪一の高名を廢らせたくねえと思つたのがこつちのあやまりだつた。江戸へ移りてえといふ文枝さんの肚を、それとなしにおいらは止めたが、そいつが仇にならうとは。……。」

「……」

「なあ眼玉、江戸の芝居を壞すなア命がけだ。さすがは大阪一の桂文枝、いゝ弟子や娘を持つたもんだ。出來ることならおいらの手で、あの若い二人を一緒にしてやつたら、文枝さんもどんなに喜ぶことか。」

「……」

默然と腕を拱いた大きな眼には、いつか露の涙が一杯だつた。

峠

一

「うーむ痛い。――これ絹。……」

「はい。」

「何んとも辛抱がいたしかねる。速う冷してくれ。」

「はい、只今。」

夫の枕許に坐して、近く生れて來ようとする赤子の産着を一くぎり縫ひ終つたお絹は、鐵漿を染めた齒並を見せてぷッつり糸を切ると、針を髷へ差したまゝ、急いで臺所へ下り立つてゐた。

なま絞りにした手拭をはだけた夫の右肩へ載せたお絹は、再び甲斐〳〵しく立ち上つた。

「直ぐに井戸から冷たいのを汲んでまゐりませう。」

「……」

懷妊しない前までは夫の手創平癒を祈つて幾度か、水垢離を取つたことのある裏手の井戸端に立つたお絹は、霜夜の夜空を震はして釣瓶に汲み揚げた水を手桶に移すと、眼を閉ぢたまゝひそかに濡れた兩手を合せた。

――夫の手創の癒りますやう、父の仇澁澤典馬の所在が知れますやう。――

そしてお絹はほッと深い溜息をついた。

武藏野を渡つて來る風が素袷の肌を刺すやうに冷たかつた。

「お替へいたします。」

「うむ。」

平八郎の右肩斜に三寸ほど、蚯蚓が腹這ひついたやうにふくらみを持つ眞赤な創痕は、もう固まりかけたと思ふころになつて毒でも這入つたものか、また〳〵疼き出して、こゝ二年近くといふもの寢たり起きたりの苦しみだつた。

「絹、拙者は敵典馬に遭はぬ前この痛みが高じて死ぬかも知れぬぞ。」

「あなたとしたことが、そのやうな弱氣でどう遊ばします。きつと典馬を見つけ出し、首尾よう討ち果しましたその上は、親子三人。……氣を落さず養生なすつて下さいませ。」

「養生はし盡した。が、到底快癒の見込はなさゝうぢや。傷の中が腐りかけてゐるに相違ない。不甲斐ない拙者と一緒になつたそなたこそ不愍でならぬ。」

「まアそのやうな。……」
「いや〱、祝言の濟んだその夜からの氣苦勞、拙者と一緒にならなんだから、かやうな苦勞もなかつたであらうに。……國を出て最早一年、狙ふ仇には巡り遭はず、しかもいつとも知れぬ拙者の體、思へば思ふほど殘念でならぬ。」
「樂しい時ばかりが夫婦ではござりませぬ。わたくしには今の苦勞も先の樂しみ、少しも苦にはしてをりませぬ。」
「常にかはらぬそなたの言葉、それゆゑになほのことこの胸が疼くのぢや。仇討に艱難辛苦は當然のことではあるが、さてこの先何年經つたら、典馬に巡り遭ふことが出來るやら。……」
「色々お考へ遊ばしますのが、お體には何よりの毒。たゞ〱御養生が大切でございます。」
「それを知らぬわけではないが、やはり絹、胸は焦慮に燃えるばかりぢや。」

櫛を取つたお絹は平八郎の亂れた髮を撫でつけて、さらに手拭を絞り直してから、縫ひさしの針を持ち直した。
行燈の灯を受けて、くつきりと大きく灯に映つたつゝましいお絹の影をぢつと見守つてゐた平八郎は、床下に死期の近い蟋蟀が忍びやかに鳴き始めると、徐ろに目をつむつて聽き澄ました。——行燈の灯が俄に暗くなつたやうに思はれたのは、障子に明るく月が昇つたためであらう。
「少しはお樂におなりでございますか。」
「うむ、餘程樂になつた。」
細く見開いた平八郎の目はお絹の顏を見詰めてゐた。
「月が出たやうぢやな。障子を開けてくれ。」
部屋に流れ込んだ月光が、寢てゐる平八郎の頤のところまで届いて、痩せた右肩と力なく蒲團の上に投げ出された兩手が痛々しく照らし出された。

「のう絹。」
「はい。」
「しかしわれ〳〵は、仇討に苦勞した外の人々に較べたら、どれ程幸せか知れぬ。拙者は美しいそなたと、生れる子供とを持つてゐる上に、その日その日の糧には缺かぬからのう。お父上の貯蓄なされた六百兩の金子があつたればこそ、存分に養生も出來、門付けもせずに敵を探せるといふものぢや。」
「はい。」
「しかしたゞ殘念なのはこの傷ぢや。それも敵典馬から受けた刀劍に苦しまねばならぬとはの。」
「それもこれも宿世の縁でございませう。今に必ず良い日がまゐります。どうぞその日を樂しみに遊ばして。……」
灯影が移つて、拔けるほどに白いお絹の襟脚を次第に上りながら、奥の襖に

墨繪のぼかしのやうに沈んでゐた。霜をふくんだ夜風はさら〳〵と木の間を縫つて、動く葉先が濡色に冷たく光つた。
裏の井戸では誰か水を汲んでゐるのであらう、冴えた釣瓶の音が一しきり高かつた。

二

文政壬午の年の正月が過ぎて、門松を立てた跡もまだそれと知れる如月の、淡雪がちら〳〵と降りそめた夜、備前岡山藩の納戸役竹中源兵衛の四男平八郎は、同藩の小姓頭青木小左衛門の一人娘絹の入婿として、岡山石關町の廣い青木邸で、今しも華やかな婚禮の式が擧げられてゐた。
平八郎と絹は部屋に下つて、廣間には祝ひの酒宴が續けられ、足輕中間共は臺所でしたゝか飲んだ酒に顔を眞赤にほてらしてゐた。

一人が酒盃を手にしたまゝ、隣の肩をぽんと叩くと、酒が膝の上に搖れ零れた。

「おい大層なお式ぢやねえか。さすが御內福な青木樣だ。おッとッと、酒が零れる、勿體ねえ」

一人はおのが腹卷をひそかに手で捜ると、聲を落して囁いた。

「おめへ、お祝儀の中味を拜んだか。」

「うんにや、まだゞ。」

「速く拜みねえ。だが、拜んで見てびつくりするよ。」

「御祝儀に驚く奴があるけえ。」

女中の目を掠めて展いて見た中味に、驚かぬといつたその口の下から、一人の仲間は、「ほう」ともう驚いてゐた。

「それ見ろ、驚いたぢやねえか。」

「うーむ。」

「唸るな、みつともねえ。さア氣付けの一杯だ。」

受けた酒盃をぐつと飮み干して、ちえッと舌なめずりしながら首をかしげる。

「なアおい、おれ達も竹中の若旦那……おッとどつこい、もう青木の若旦那だ、その三國一の花婿樣の、萬分の一にでもあやかりてえたア思はねえか。」

「思つたつて仕方がねえぢやねえか。」

「仕方がねえなア始めからわかつてるが、思ふだけ思ふ方が德ぢやねえか。」

「つまらねえ大望は止めにしねえ。そんなことをいつてやがるから、折角の酒が冷たくなつちまつたぢやねえか。あけちまつて、熱い奴を戴くとしよう。」

外はどうやら霙になつたらしく、ばら〳〵ッ軒を打つ音が頻りだつた。

「時におめえ、澁澤の若旦那の噂を知つてゐるか。」

「何ッ、聲が高え。知らねえでどうする。」

「澁澤の若旦那も竹中の若旦那に優るとも劣らねえ男ッ振りだ。だが肝腎のお嬢さんに嫌はれたんぢや仕樣がねえ。何んでも近ごろア自棄ンなつて、矢鱈に酒を呑み廻つてゐなさるといふぢやねえか。」
「ついこの間、おれも若旦那が道端で醉ひつぶれて、管を卷いてなさるのを見かけたせ。」
「管を卷くゝれえだから、お嬢さんに嫌はれるのか知れねえが、考へやうによつちやア、お氣の毒ぢやアねえか。」
「氣の毒なものか、當りめえだ。」
「なせよ。」
「なせつておめえ、何んでも話に聞きやア、澁澤の家柄だけアどこにも負けを取らねえんだが、家の中ア火の車とのことぢやアねえか。青木のお嬢さんを手に入れようとしたのも、色と慾との二タ道かけた離れ業といふこッたせ。」

「そいつア初耳だ。」
「だから青木の大旦那が、男ッ振りもよし、家柄もよし、おまけに腕ッ節も竹中の若旦那よりや一枚上手だつたが、きつぱり拒絶んなすつたんだ。それにお嬢さんは、澁澤の若旦那から附文された前に、竹中の若旦那ともうちやんと出來てたつていふんだから面白いぢやねえか。」
「出來てゐたつていふこたア、このおれも小耳に挾んだが、日ごろの思ひが叶ふたお二人さんはさぞ嬉しからうなア。」
「家中一番の辨天樣を自分のものにする氣持ちア、また格別に違えねえやな。」
奥の廣間の客がぼつ〳〵歸り始めると、臺所で無駄口を叩いてゐた足輕仲間も一人減り二人減りして、土產の馳走をぶら下げながら歸つて行つた。
　やがてすつかり客が歸つて、そこへあと片づけをする物音が止むと風を加へた音が思ひ出したやうに軒を打つて、平八郎とお絹の部屋を最後に、行燈が消

されると同時に大きな邸は冷たい闇の中に呑まれてしまつた。それから半刻ほど經つたかと思はれる時分。——身輕く土塀を乘り越えて奥庭へ突ッ立つた一人の覆面の武士が、ぎらりと太刀を拔き放して、身を屈めながら母屋へ忍び足に近寄つたが、大刀の鋩で雨戸をこじ開けるが否や、魔のやうにずるりと軒下へ忍び込んで、そのまゝ奥へと足音を忍ばせた。

「誰ぢや。」

「——」

「誰ぢや。」

が、平八郎の義父の小左衞門の二度目の誰何が終らないその瞬間、颯と障子が開いて間一髮、「あッ」といふ小左衞門の叫び聲が外に洩れた。

「卑、卑怯者ッ。」

しかも小左衞門の聲はそれきり二度とは聞かれなかつた。

とろ／＼とした平八郎、初夜の夢を破れて颯と飛び起きると共におッ取り刀で廊下へ飛び出したが、しかも夢中で走つて來た曲物は、物をもいはず平八郎の右肩へ斬りつけたのだつた。

「あッ。」

「思ひ知つたか。」

さらに二の太刀が風を切つて振り下されたのを、危く拔き合せた平八郎は、雨戸にどんとよろめきながら叫んだ。

「その聲はたしかに典馬ッ。」

思ひ知つたかと不用意に發したおのれの聲に、それと知られた澁澤典馬は、俄に狼狽て、逸早く踵を返すと、こじ開けた雨戸から外の闇へ消えて行つた。

「うむ無念。く、くせ者を、と、取り逃した。——」

喘ぎながら刀を杖に立上つた平八郎の背をお絹は健氣に支へてゐた。

「もし、傷は淺うございます。お氣を、お氣を確かにお持ち遊ばしませ。」

三

紺の股引に同じ色の足袋、白緒の麻裏草履、尻を端折つて十手を腰にぶつ込んだ目明しの留吉は、腕を組んだまゝ江戸名物の空ッ風を眞正面に顔へ受けながら、四ッ谷御門外の屋敷町を通り拔けようとしてゐた。

「……青木の旦那御夫婦は何んてえ親切なお方だ。嬶が産をした時にや生憎の一文無し。そいつを厭な顔もなさらず借しておくンなすつた。そればかりぢやアねえ、このしがねえおれにまで、事情を打ち明けてのお賴み。敵探しに存分のお手當を下すつてから、もう一年にもならうといふもの。……考へりや考へる程面目ねえ。――」

石に躓いてとん／＼と、危く轉びさうになつたのを漸く踏みこたへた留吉は、

腰の十手に手が觸れると、再び組んで首を振つた。

「青木の旦那も心ン中ぢやア、どう思つてゐなさるかわからねえ。おれア申譯がなくて、近ごろア旦那の顏を見るのも氣の毒でならねえんだ。敵の奴アいつてえ何處を徘徊ついてやがるんだらう。江戸へ這入つてゐねえとなりやア、いくらおれだつて見つけるわけにやいかねえが、この江戸が人間の掃き溜ッてこたア今も昔も變りはねえ。必ず這入つてるに違えあるめえがなア。……」

屋敷町を通り拔けて、何時の間にか留吉は寺町へ這入つてゐた。

「……人相がはつきりしてるんだから、遭へば逃しつこねえんだが、青木の旦那が湯治から歸ンなさるまでにや、どうしても探し出さにやならねえ。……」

町角を曲らうとした途端、留吉はぽんと肩を叩かれた。

「おい、留兄ィ。」

「うッ。」

「何をぼんやり考へ込んだるんだ。それぢや犯人ァ逃げつちまはうぜ。」
「秀か。……」
「秀かもねえもんだ。いつてえどうしたッてんだ。旦那からでも叱られたのか。」
「失策ァやらねえが。……」
「ぢやァおッ嬶と喧嘩か。」
「さうぢやねえ。探す侍が見つからねえんだ。」
「やつぱり犯人ぢやねえか。」
「まァ、そんなもんだ。」
「久し振りに逭つたんだ。どこかで一杯やらうぢやねえか。」
秀と呼ばれた同じ岡ッ引仲間の秀三は、先に立つて歩き出した。
「皆目見當がつかねえのか。」

「うむ。」
「人相は判つてゐるんだらう。」
「うむ。」
「それぢや雲を掴むやうな譯でもねえわけだ。まあ根氣よく探すんだな。」
「根氣にも限りがあらァ。ざつともう一年ばかり探してるんだ。」
「そいつァまた馬鹿な根氣だ。だが一年も探して居ねえとすりやァ、江戸にやゐねえ譯だ。」
「是が非でもゐてもらはにやならねえんだ。」
「そんな無理をいつたつて仕様がねえ。ともかくあすこの蕎麥屋で一杯やるとしよう。」
「折角だが、今日は止めだ。」
「久し振りぢやねえか、附合ひねえ。おめへに拂はせるたァいはねから。」

「有難てえが、酒を飲んでも甘味くなささうだ。事によつたら助けてもらひてえが、その時ァ頼むぜ。」
「お安い御用だ。何日何時でも聲をかけねえ。」
「それぢや、この邊で別れるとしよう。」
「さうか。ぢやあばよ。」
初冬の入陽が彼方の空に名殘りの赤光を投げかけてゐたかと思ふ間もなく速くもぐんぐんと迫つた灰色の夕闇に包まれて、漸く衰へた筑波嵐が箒で掃くやうにかさこそと、道の落葉を垣根溜りへ運んでゐた。
「すつかり日が短かくなりやがつた。」
相變らず腕組をした留吉は、薄暗くなつた空を見上げて呟いてから、再び俯向きの歩みを續け始めたが、足は一向に捗らなかつた。權田原の淋しい原つぱが向ふに見えて、鴉が一羽夕闇空を飛んで行つた。と、その鴉を眼で追つてゐ

た留吉は、突然彼方から大跨に急いで來た若侍に、ばつたり突當つた。
「無禮者ッ。」
若侍の肘で、いやといふほど右の腕を突かれた留吉。
「痛えッ。」
「白痴め、よもや盲目であるまい。」
そのまゝ行き過ぎる武士を、右の胸を手で押へた留吉が癪な氣持で見送つた途端、ふと眼に映つたのは路上に落ちた印傳の紙入。おやッと思つて拾ひ上げた留吉は、ぢつと見入つた。
「ふん、眞直ぐ歩くなァお互様だ。おれが知らずにゐたら除けて通りやいゝんだ。馬鹿の白痴のとしやら臭え。財布を落すてめえの方がよつぽど白痴だ。よし、この紙入で一つ高え頭を下げさしてやれ。……」
もと來た道を一目散に、さすがは商賣柄追ふ留吉の足は早かつた。

「おーい、お武家様ァ。」
立ち停つた若侍は無言で突ッ立つた。
「ちよつと待つておくんなせえ、お侍さん。」
「何用だ。」
先刻のいひがゝりと早合點した武家は、きッと身構へた。
「そんなおつかねえ目付ァ止しておくんなせえ。何もいひがゝりをつけようッてんぢやござんせんが、眞直ぐ歩くなァお互え様、一寸の虫にも五分の魂といふことァよく御承知のはず。……」
「この上に無禮を申すか。」
「無禮とおいひなさるが、あつシァわざ／＼親切におめえさんの落シ物を届けに追つかけて來たんでげんせ。」
「何と申す。」

「ほれ、この財布はおめえさんのぢやァござんせんか。」
「おゝ、それはたしかに。」
「それぢや、お渡し申しやしたせ。」
「うむ、忝けない。」
とう／＼頭を下げやがつたなと、留吉は小氣味よく腹で笑つたが、しかしそれと同時に留吉は若侍の人相が氣になつて、どこかで見たやうな侍だと、いくら頭をひねつても思ひ出せない焦慮が、ます／＼氣持をいら／＼させた。
「それぢや御免なすつて。……」
「行け。」
右と左に別れて、すた／＼と急ぎ出した道は早くも眞ッ暗となつて、廓裏の鼻緒の白さだけがほのかに浮んで見えるばかりだつた。
もの、二、三丁も來た時分、俄に立ち停つた留吉は、はたと手を拍つて、も

のに憑かれたやうに叫んだ。

「うむさうだ。」

再び踵を返した留吉は、矢のやうに武士の後を追つた。」

四

草鞋の底に霜を踏んで平八郎夫婦は一まづ箱根の湯治先から江戸へ戻つた。」

「やはり住み馴れた家がよい。」

緣先に坐蒲團を敷いて、珍らしく元氣な平八郎の聲。

「それはもうわが家に越したところはございませぬ。」

すつかり掃除を濟ましたお絹は、手を拭き拭き平八郎近く閾際に坐つた。

「しかし遠路をかけての旅ゆゑ、そなたの軀が氣になつてならなんだ。」

「御心配はございませぬ。わたくしはもうあなた様の元氣な御様子さへ見せて

戴けば、いつも健かでございます。」

「いや、健かなのは何よりぢや。」

「典馬は名代の腕達者。あなた様が御丈夫でないことには、油斷も隙もなりませぬ。幸ひに箱根のお湯は不思議とよく利きましたのが、何より嬉しうございます。」

茶を淹れにお絹が立ち上ると、入口の方で訪ふ男の聲がした。

「御免なさいまし。」

「はい、どなた。」

「留吉でございます。」

「おゝこれは留吉さん。只今戻つてまゐりました。」

「知らねえことゝはいひながら、御手傳ひにも參じませず、どうか御勘辨なすつて下さいまし。——旦那はお寢みでございますか。」

「いゝえ、起きて居ります。」
「それはお珍らしい。御病氣の方はもうすつかりおよろしいんで……。」
「すつかりとは行きませんけれど、少しは元氣になりました。」
「それは〳〵。御新造様の御丹精が目に見えるやうでございます。こんな嬉しいことアございません。時に御新造様、今日は大吉報を持つて參りやしたんで。……」
「えッ。大吉報――。」
「へえ。」
「さア、こつちへ上がつて下さいまし。旦那様は緣先においでなさいます。」
引ッ張り上げるやうにして留吉と共に緣先に轉がり出たお絹は、體中で息を彈ませてゐた。
「もしあなた――。」

「何事ぢや騷々しい。おゝお前は留吉ではないか。留守中は何かと雜作をかけたが……。」
「あなた、それどころではございませぬ。留吉さん、速う申上げて……。」
「へえ、かしこまりました。旦那様、實ァ敵が知れやしたのでございます。」
「なに、か、かたきが知れたと。」
「どれほどお二人様のお歸りを、お待ち申したか知れやせん。思ひ切つて湯治先まで出掛けようと、何度も思ひやしたが、もしか途中で行違ひになつちやァ事だと、けふまでためてをりやした。――首を長くしてこんなに待つたことァ、生れてから四十年、たゞの一度もありやァいたしやせん」
「それ、それに相違は、ないであらうの。」
「金輪際間違ひッこはございせんが、念のため首實檢をしておくんなせえまし。その首實檢にやあつしがいゝ機會を見付けてめえりやすから、どうか篤と御覽

なすつて。……旦那がお賴みンなつてからかれこれ一年。さつぱり見當がつかねえために、あつしア氣の毒で氣の毒でならねえところから、毎日朝から晩まで江戸中を歩き廻つてをりやした。ところが間もなく、一ン日中探しあぐんだ末、權田原の淋しい道をとぼ〳〵と歸つてめえりやすと、どんとあつしに突き當つておいて四の五の吐かしやがるから癪たア思ひやしたが、何んといつても相手はお武家、そのまゝ歸るより仕方がねえと、まアあつしやア諦めて行きかゝると、足許に落ちてゐたのが、その士の紙入。こいつアしめた。この紙入を叩きつけて溜飲を下げてやらうと、追つかけてもう一度顔を窺き込むと、どうも見たことのある氣がするぢやアござんせんか。だが、思ひ出せずに引返えすうち、ひよいと頭に浮んだのが澁澤の人相でげす。頭に滲み込んでゐた奴がどこかで見たやうな顔に見えたんでござんせう。取つて返して跡をつけ、左門町のある武家邸に這入つたのをたしかめた上、それからは毎日〳〵張り込んで樣

子を探り、やつとの思ひで正體を突き止めたわけでござんすが、奴ア今、龍口十兵衞と變名して、邸の中で毎日ごろ〳〵してゐるのでござんすよ。」

「そこまで判れば間違ひはなからう。」

「へえ。間違ひはござんせん。身許アすつかり洗つて見やした。」

「忝けない。厚く禮をいふぞ。それでは直に、留吉、案内を賴む。」

「おッと旦那。待つとくんなせえやし。旦那ア今にも乘り込まうと仰しやるんでござんすか。」

「敵の所在が判つては、一刻も猶豫は相成らぬ。」

「ちよいと待つておくんなせえ。さうお急ぎなさらずとも、奴ア旦那方が江戸においでのことアちつとも知らぬ樣子、逃げる氣遣ひは金輪際ござんせん。それにあつじが探つたところぢやア、邸ン中にや十人近く腕ッ節の强さうなのがゐる樣子。今旦那がお乘り込みなすつても、多勢に無勢、決して得たこッちや

アござんせん。それよりも一人と一人、あつしが必ず機會を見付けやすから、それまでお待ちなすつた方がお爲めでござんせう。」

「留吉さんがあのやうにいうてくれますゆゑ、それまでお待ち下さいませ。萬一逃がしになるやうなことがあつては、取り返しはつきませぬ。」

「うむ、それも道理ぢや。では留吉、何分頼むぞ。」

「合點でござんす。」

丈夫な體でさへあれば、相手の二人や三人倒くまで戰ひ抜くのであつたが、傷所の痛みが失せぬ體はそれもならず、平八郎は右肩を押へて無念の齒嚙みをするばかりだつた。

五

一日千秋の思ひで待つた時期が遂に來た。直ぐには江戸を立去るとは見えな

かつた澁澤典馬が突然今夜江戸を立つて、新宿から甲州街道を經て京へ上るといふことを、今、留吉が知らせてくれたのだ。愈々不倶戴天の仇を報ずるのは明日だと思ふと、平八郎は鳩尾の奥から何かがこみ上げて來る思ひがした。

「留吉、長い間大層苦勞をかけたの。」

「飛んでもございません。たかが近所の附合から、あつしがどれだけ御恩になつたか知れやアいたしやせん。」

「明日は命を全うするとは考へられぬ。――絹お前はどうあつても、拙者と共に敵を討つといふのぢやな。」

「はい。國を出ました時からの覺悟、どうぞお連れ遊ばして下さりませ。」

「女子に助太刀をしてもらつたとあつては、平八郎後の世までの名折れになるが、それも已むを得ない。共に死ぬ覺悟をしてまゐれ。」

「有難う存じます。」

「死ぬ身とあればあとの始末をつけねばなるまい。これ留吉、この家の家財道具は悉くそちに取らせるぞ。なほこゝに遣ひ殘りの金子が三百兩近くある。萬が一にも我々夫婦が返り討になつたと聞いたら、そちが骨を拾つてくれ。そしてこの中の百兩を永代供養料として、どこぞの寺へ納めてくれるやう。殘り二百兩のうち五十兩はそちにやる。百五十兩は預かつておいてくれ。」

「へえ。」

「しかし、夫婦共々死ぬやうなことになれば所詮は入らぬ金ぢや、お身が勝手に處分するがよい。ただ二人が討たれて死んだとだけを、國許へ知らせるのぢや。」

「旦那、お言葉中ぢやござんすが。縁起でもねえ、返り討なんぞになる氣遣ひはござんせんよ。あつしが、觀音様へお祈り申してをりやさアね。」

「勝負は時の運だといふが、しかし、拙者のこの身の傷が平癒してをつたらの

う。」

　ぢつとひと所を見詰めたお絹の眼には、次第に疊の目がぼやけて、やがて熱い涙がほろりと一しづく手の甲に落ちた。それを押し隱さうとして素早く轉じた視線は、そのまゝ平八郎の視線と出遭つた。

「絹、女には女の覺悟もあらう。拙者の支度はも早いつでも出來ること。人に笑はれぬやうに髮でも束ね直したらどうぢや。」

「はい。」

　お絹は靜かに立上つた。

「して留吉。」

「へえ。」

「典馬の立つのは、今夜何時頃だの。」

「日が暮れると間もなくでござんせう。」

「うむ。では夜道を府中あたりまで急がうといふのだな。」
「たしかにさうに違ひござんせん。そこであつしの考へぢやア、旦那方お二人はこれから直ぐにお立ちなすつて、小佛峠で奴をお待ち受けなさるのが、この上もねえ計略だと存じやすよ。」
「小佛峠と申すか。」
「へえ、あそこア御承知の通りの本道。松の根方にでも隠れてゐなすつて、いきなり飛び出して斬りつけられたら、いくら典馬が腕達者でも、返り討ちにやア出來ますまい。」
「して彼の旅は一人か。」
「仲間の銀藏といふ奴を連れて行くと聞きやした。」
「うむ。よう分つた。では半刻ばかりのうちにこゝへ駕籠をつけてくれ。絹は拙者にも増して不自由な體、ゆる〳〵駕籠でまゐるとせう。」

平八郎は立上り様、縁側で髪を梳いてゐるお絹を見守つた。

支度が整ふと共に家を後にした平八郎とお絹の駕籠は、内藤新宿を出はづれると鍋屋横町から荻窪、歳藏岡を過ぎて、早くも田無の宿に差しかゝつてゐた。

文政六年十月二十日片破れ月が、まだ人ッ子一人通れない街道を淡く照らして、肌吹く武藏野の風は、ひとしほ二人を寂寥の底へ追つて行つた。

「こんなことでどうする。明日は何としても討たねばならぬ澁澤典馬。――」

平八郎は我れと我が心に鞭打つて、幾度も駕籠の中にほつと深い溜息を吐いた。

六

最初の程はさうでもなかつたが、烏山を過ぎて仙川へ掛かる頃になると、平八郎は時々顔をしかめて右肩の創痕を押へてゐた。

眠れぬ一夜を與瀬の旅宿に過した二人は、まだ夜の明けきらぬ街道の露を踏んで、互ひに勞りながらの歩みを續けた。

本小平、小川の里を右に見て、多摩川を渡ると、あたりは御嶽、雲取、甲武信の山々が曉の薄明りにそれ〴〵の威容を誇つて、正面には頂上に旭日を受けた富士の白嶺が、神々しい端整な姿を見せてゐた。

やがて二人は小佛峠に差し掛かつた。遙かに開けた銀界の下に燻銀のやうに光つてゐるのは相模川であらう。二人の足はおのづから急だつた。

「絹。」

「はい。」

「典馬のこゝへ來るのは、明け六つだと申したな。」

「左樣でございます。」

「まだ六つまでには間があらう。この松の木立こそ屈強の場所、こゝで休息を

しながら待つとせうではないか。」

「はい。」

峠の道端に腰をおろして、今更に自然の美しさを眺めた二人は、おのづと瞼の熱くなるのを覺えて、思はず顏を見合せた。

するとこの時だつた。あたりの靜けさを破つて登つて來る人の足音が夫婦の耳を奪つた。いひ合せたやうに二人は下手に見入つた。

「おゝ典馬ぢや。」

「えッ。」

遠目にもはつきりと澁澤典馬といふことが知れた。

平八郎は立上りざま、きらりと一刀の鞘を拂つた。

「澁澤典馬、辱を知れ。」

その聲にぎよろりとこちらを見守つた典馬は、さすがにあわてたのであらう、

はッと身を交すと同時に踵を返さうとしたが、しかも相手が夫婦二人切りだと知ると、危く返さうとした足を踏み停めた。

「おゝ珍らしや青木平八郎夫婦、久し振りの對面でござつたな。」

「默れッ、極惡非道の人非人とは汝のことだ。天に代つて誅罰してくれる。覺悟せよ。」

「えゝおのれが何と申す。左樣な覺えは少しもないぞ。」

「白々しや。去んぬる秋の末つ方、國表において父小左衞門を殺し、あまつさへ我が身に痛手を負はせて逃げ失せし卑怯者。武士ならば武士らしく勝負せよ。」

「うむ、求むるところに非ざれど、勝負とあらば是非なし。返り討だ、覺悟しろ。」

曉の山氣は殺氣を交へて、犇々と身に迫つた。典馬の鋭い太刀を危く刎ね返

した拍子に、平八郎は右肩の痛みに呻きながら、僅かに柄を持ち添へてゐた右手を離すと、忽ち左手一本のまゝ青眼に構へた。典馬はその頽勢に乘じて、一氣に殪さうとの氣組み凄じく眞向からひた押しに迫つた。

平八郎は咄嗟の間に身を捨てゝ相手を斬る覺悟であらう。典馬がえいッと掛聲諸共二の太刀を入れて來たのを、右肩の創痕で受けながら、左の太刀は捨身の突き鋭く典馬の喉へ走つた。と同時に兩人共ばつたりとその場に倒れた。

典馬の左手に懷劍を持つて挑みかゝつてゐたお絹は、二人が血を噴いて倒れるのを見ると、素速く平八郎を抱へた。

「平八郎樣ッ。首尾よう。……」

「絹か。たしかに手應へ、と、止めを。……」

「はい。」

平八郎を助け起して、お絹は柄も徹れと典馬の胸を突き刺した。

「あなた。しつかり遊ばして。……しつかり。……」
「因縁の創痕に、またも二度の太刀を受けては、もはや命は助からぬ。そなた、今より直に國許へ馳せ歸り、敵を討つたと。……そして體を大切に。……」
「もし、平八郎樣、平八郎樣。――」
見る／＼うちに蒼白となつた平八郎の顏を見詰めながら、お絹は草の上に置いた懷劍を取るより速く、我れと我が乳の下をぐさッと突き刺した。
「うむ。は、早まつたことを……。」
「あなたに先立たれて、生きる力はござりませぬ。この世の契りは短かうても、必ず、必ず、あの世で……。」
平八郎は震える手でしかとお絹をかき抱いた。
西の空に殘つてゐた片割れ月が、二人の命のやうに次第／＼に消えて行つた。

山越しの風

一

山田信市が小さい風呂敷包を一つぶらさげて、故郷の村へ歸つて來たのは、秋も終りの日本海を渡つて來る冷たい風が、山越しに吹き下して來る小寒い夕であつた。
信市はみすぼらしい姿で、うなだれがちに、馴れた畦路をすた／＼とわが家

の方へ急いでゐた。東の山の上には星が光つて、野面には夕暮が深まつてゐたが、まだ足許が見えない程ではなかつた。

不意に行く手にあたつて、はたと人の立停る氣配がした。信市ははつとして思はず顔をあげた。

一間あまりの先に、野良歸りの娘が、もんぺ姿で脅えたやうに立竦んでゐるのであつた。

「あ、おしのさん。――」

信市は思はず懐しさうに聲をかけた。が、おしのは返事もせずに、避けようのない狹い畦路に立竦んだまゝだつた。明らかに、表情を石のやうに硬くして、恐怖に聲も出ない樣子であつた。

そのおしのゝ脅え切つた顔を見てゐると、信市にはむら〳〵と憤怒の情が込み上げて來た。

「何んだ、おれが恐いのか。」

信市はおしのを睨んで、大きな聲で呶鳴つた。

するとおしのは、いきなり身を翻したと見る間に、足も宙に浮くばかりの速さで、一散に逃げ出して行つた。

「畜生ッ。」

信市は烈しい語氣で呟いたが、後を追はうとはせずに、おしのゝ逃げて行つた道から、徐かに歩き始めた。

歩いてゐる中に、信市の瞼は熱くなつて、涙が頬を傳はり始めた。

(――おれは心から罪を後悔して、眞面目に働かうと思つて村へ歸つて來た。だがおしのゝあの樣子では、村の者は誰も彼もおれを恐れて、相手にしてはくれないだらう。さうすればおれには嫁の來手もない。話相手もない。おれはこれから先長い一生を、誰にも相手にされない嫌はれ者になつて、生れた村にゐ

ながら、孤獨の日を送らにやならない。」
　さう思ふと、信市の心は折から迫る夜の色よりも暗くなつて行つた。――今日まで生長して來た土地が、急に知らぬ他國のやうに、よそ〳〵しく冷たいものに思はれた。
　信市は家へ歸るのが厭になつた。このまゝどこかへ姿を匿してしまひたいと思つた。すると、彼の歩みはいつしかぴたりと停つてゐた。
「山田君。」
　この時、不意に信市に呼びかけて背後に迫つた人影があつた。聞き馴れぬ聲に、信市ははつと振り返つた。
「迷つてはいかんよ。眞直ぐに家へ歸りたまへ。」
人影は恰も信市の心の裡を見透かしたかのやうにいつた。すでに深まつた夜の色に、相手は定かに見分け難かつたが、それでも洋服を着た四十過ぎの年配

と、言葉の様子から優しい微笑を浮べてゐるのを、察することが出來た。
「あなたは誰方ですか。」
　信市は不審さうに訊ねた。
「私は司法保護委員といつて、君達のやうな人の保護に當つてゐる、木藤彥三郎といふ者だよ。政府では刑務所を出た者や、君達のやうな人が、再び過ちを犯さないやうにと、溫い保護の手を差し延べてをるんだ。」
「……」
　信市は返事をしなかつた。自由の身になつて歸つて來たと思つてゐたのに、背後には法の眼が附纏つてゐたのかと思ふと、黯澹たる前途に、一層憂鬱が深まるばかりであつた。
「君は村の娘に逢つて、急に家へ歸る足が鈍つたやうだが、そんな意志の弱いことでどうする。みんな自由の身になると、さうして第一歩のところで踏み迷

つてしまふのだ。あの娘は君を恐れたのではない。いきなり君の姿を見たので、吃驚したゞけだ、村の人達は誰も君を恐れてはゐないのだよ。むしろ君の家の事情に同情して、君が歸つて眞面目に働くことを望んでをる。――君の留守中に、君のお父さんが亡くなつたことは、君も聞いて知つてるだらう。その時は村の人達の情だけで、立派に葬式を出すことが出來た。それを見ても、村の人達は決して君を憎んでゐないことが解らうぢやないか。それにお上では、三年の執行猶豫といふ、溫かい情ある判決を下さつたのだ。このお上のお情と村の人達へのお詫びには、これから君が家業に精出して、殘されたたつた一人のお母さんに、孝養を盡すことを措いて他にはない。――さ、歸らう。私が一緒に途つて行つてあげる。お母さんは君一人を賴りにして、君の歸りを待兼ねてをる。そのお母さんを捨てゝ、何處へ行くといふんだね。お母さんばかりではない。君の未決にゐる間中、心配し通して亡くなられたお父さんの靈に對しても、

君は家へ歸らないでは濟まん筈ぢやないか。お上の情も、君に前非を悔ひて孝道を盡せといふお訓しなんだ、お上の情を裏切るやうな心を起してはいかん。よしんばこれから先、多少辛いことがあつても、誠心誠意でそれに堪えて行くことが、君の罪の償ひだ。それも、君に一人で勝手に苦しめといふんぢやない。辛いことがあつたら、いつでも私が相談に乘る。そのために、お上は私を差向けられたんだからな。この行屆いたお上のお計ひに對しても、君は立派に更生してくれなければならんだ。さ、お母さんの待つてる家へ歸らう。」

保護委員の木藤彦三郞は、熱心にそれだけいふと、信市の返事も俟たずに、家の方へと促して行つた。

二

山田信市は猥褻傷害罪を犯して、懲役二年、三年の執行猶豫を言渡されて釋

放された。

今年二十五歳の青年であつた。彼は關西では珍らしく小作人が多いといはれる縣村の、六反ほどの田を小作してゐる、六疊と三疊二間きりの藁家に貧しい小作人の子として生れた。

貧しければ貧しいなりに、小作人には小作人なりに、あまねき日の光が大樹から雜草にまで及ぶのと等しく、信市にも青春の日が訪れた。誰が嫁を娶つた誰が婿を迎へた、何處の家には縁談が纒つたと、信市の周圍は青春の日らしい華やかな噂に明け暮れて行つた。村の青年達や年頃の娘達は、さうした賑かな噂の中に、それぞれ落着くところへ落着いて行つたが、信市の身邊ばかりは、來る日も來る日も、顧みられない雜草のやうに、灯の消えたやうな寂しさが續くばかりであつた。

しかも顧みられない彼の身裡にも、異性を慕ふ赤い血は狂ほしく騷いでゐた。

婚禮をして夫婦で野良へ出てゐる友達の姿も羨しかつたが、それよりも信市の血を羨望に駈り立てたのは、戀仲の青年と娘とが、人眼を忍んで寄添つた睦じい語らひの姿であつた。信市には相手がなかつた。彼は娘達の誰にも思ひを寄せてはゐなかつた。軒の傾いた、狹い貧しい自分の家を顧みると、こんな家へ嫁の來手があるものか、愛を訴へたところで、耳を傾ける娘があるものかと、自ら棄鉢になるばかりであつた。果して信市の家には一度の縁談らしい話もなく、一人の彼に好意を示す娘もなかつた。

信市は境遇への諦めと棄鉢から、一人一人の娘達に、逆に憎惡の思ひすら抱いた。娘達は、信市にとつては青春の敵であつた。彼の青春の血は、世の娘全體に對して烈しい思慕をたぎらせた。信市はその矛盾に喘いだ。彼の心は次第に物狂はしい興奮の日を迎へるやうになつて行つた。

信市は村でも氣の弱い温和しい青年だつた。それだけに惱みを友達に訴へる

こともせず、ひとり心に包んで苦しんでゐるのが、一層陰氣な鬱血の狂はしさを增した。

かうして信市は遂に自ら青春の犧牲になつたのであつた。さすがに彼は見馴れた自分の村の娘に、激情を燃すやうなことはしなかつたが、物惱ましい春宵の野邊で、若さを誇るやうな姿をした隣村の娘と行き逢つた刹那、發作的に激情の犧牲となつて、忌むべき前記の罪名を犯すに至つたのであつた。それは閉された青春の憤りが、自制を破つて自ら爆發したのだといへるであらう。

公判に於ては、家庭の事情と、信市の心情と、そして全く發作的な犯罪であつたことゝが酌量された。信市は判決を聽いて、法廷で聲をあげて泣いた。その上父が死んで、村人の情で無事に野邊の送りが濟まされたと聞かされると、心の底から後悔して、必ず罪の償ひをして更生しようと誓つた。

が、氣の弱い信市は、さすがに白晝村へ歸つて、人々に顏を見られるのが辛

かつた。わざ〳〵途中で時を過ごして、暮れかゝるのを待つて村へ這入つたのであつたが、折惡しくおしのゝ野良歸りに行き逢つてしまつたのであつた。

もしもおしのが、信市の言葉に應じて、普通に挨拶でもしてくれたのであつたら、信市の村人への感謝と、後悔の念と、更生を誓ふ意志とは、忽ち强められて立直ることが出來たであらう。が、信市はおしのから、物もいへない恐怖の念で迎へられると、一度にして村人への感謝を崩されずにはゐられなかつた。

「そんなにおれが恐いか。」

それは心からの叫びとなつた。父の葬式が無事に出たといふのも、おれの家への村人の同情であつたのだ。――さう思ふと、信市は明日から自分の身を置くところがないやうな氣がした。

思ひがけない木藤彦三郎の出現によつて、危ふく進退に迷つたところを、と

もかくも家へ連れ歸られたのであつたが、明日からの暮しを思ふと、信市は不安で落着けなかつた。

しかも信市の不安な想像は事實となつて現はれた。

三

信市は家へ歸つた翌日、母に連れられて村長の家へ、お詫びを兼ねて挨拶に行つた。信市の家はこの村長の家の田を小作してゐたのであつた。

村長の山中新右衞門は、眼鏡をかけて半白の頭髪を分けた穩健な人であつたが、どちらかといへば物事に冷淡な方で、日頃役目以外には、村の事も田畑の事も、自分の家のことさへもあまり構はない方であつた。

信市の母は、緣先へ廻つて地面へ膝を突くと、小柄な躰で平蜘蛛のやうになつて、伜の不始末をひたすら詫び入つた。信市はその後に、同じやうに膝を突

いて頭を下げてゐたが、恐る〳〵緣に近い座敷の新右衞門を窺ふと、村長は新聞から眼を放して、眼鏡越しにじろりと母子を眺めた。

「執行猶豫になつたといふのか。」

新右衞門は苦々しい聲で云つたが、それには歸つて來たのを不快に思つてゐるやうな響きさへ感じられた。

「はい、お上のお情で。……」

信市は言葉尻に涙の込上げて來るのを覺えた。

「外聞の惡い。——」と新右門は蔑むやうに云つた。「恥を知れ。わしの顏に泥を塗つたも同じことだぞ。」

「申譯ございません。これから生れ代つた氣になつて眞面目に働きます。この度だけは、お赦し下さいまし。」

「生れ代つた氣にならなくてどうする。歸つて死んだ親父によく謝まれ。」

「濟みません。……」
信市母子は村長に暇を告げて、悄然と廣い屋敷の中の門の方へ歩いて行つた。
信市は村長から微塵の温かさも感じることが出來なかつた。心は鉛のやうに重苦しく沈んだ。
ふと見ると、母屋の入口に下女のおもとが、箕を提げてこちらを見てゐた。以前は心易く口を聽き合つたおもとであつたが、けふは笑顏を見せるどころか挨拶の默禮ひとつせずに、何かしら珍らしいものでも見るやうな眼で、じつと見送つてゐるのであつた。信市は下女の顏にさへ蔑みの色を讀み取つた。
「お母あ、早く行かう。」
慍つたやうに母を促して、信市は急いで村長の門を出た。
信市の蒙つた心の痛手は、村長の屋敷に於てばかりではなかつた。二三日過ぎると、おしの、口から、信市はあの事件以來すつかり人が變つて、恐ろしい

人間になつた、娘を見れば、凄い眼付をして呶鳴るといふことが傳へられて、それが村中の噂になつてゐた。
信市が野良へ出てゐると、以前は言葉を交はした村の青年や娘達が、遠くから身を停めて彼を眺めた。
(何が珍らしい。見、見世物ぢやないぞ。)
いきなり駈け出して行つて、滅茶苦茶に毆りつけてやりたいと、信市は思つた。
(――どうせおれは一生浮ばれない、爪彈きを受けるのだ、もうどうなつたつていゝ。)
時々破れかぶれな氣持が燃え上つて、村中を暴れ廻つてやりたいやうな氣がした。
信市は誰にも挨拶をせずに、人の姿を見ると顏をそむけて依怙地に素知らぬ

振りをした。次第に人の顔を見るのが厭になつて來た。

半月ばかり經つたある夕方、丁度歸村の時おしのに行き逢つたのと同じ時刻に、信市は再びおしのが、ひとり野良から歸つて行く姿を見掛けた。畑を一つ距てゝゐたが、信市はおしのの姿を見ると、むら／＼と半月前の屈辱と憤りが込み上げて、一散に畑から驅け上つた。

「おしの。」

背後に迫つて、信市は劈くやうに叫んだ。ぎよツとして振り返つたおしのは近々と迫つた信市の凄じい形相を見ると、あの時と同じやうに立竦んで、眞蒼になつた。

「お前はおれが恐いのか、おれが憎いのか。」

信市は烈しく疊みかけた。おしのは恐怖に口も利けなかつた。

「おれがお前に何をした。何の怨みがあつて、おれの惡口を云ひ觸らしたん

だ。」

嚙みつくやうに信市が呶鳴つても、おしのは眼を瞠つてがた／＼顫へてゐるばかりであつた。

おしのは今年十八になる、はち切れさうな青春の血を包んだ乙女だつた。じつと見詰めてゐると、信市にはおしのゝふくよかな頰も、むつちりと彈力的に張り切つた胸のあたりの膨らみも、丸い顔も、すべてが憎惡の血を搔き立てるやうに思はれて、その軟かい肩口を鷲摑みにして、思ふ存分腹癒せに痛めつけてやりたい衝動に驅られた。

「何とかいはんか。」

思はずが一歩寄り迫ると、おしのははツとわれに返つたやうに、はじめて叫んだ。

「か、勘忍して。——」

叫ぶが否や、身を翻しざまに、おしのは足も地に着かない姿で逃げ出してゐた。

信市は追はなかつた。が、彼は烈しい息を吐いて立盡してゐた。

この出來事は、またしても信市の身に、不利な一つの噂を生んだ。

信市はおしのを狙つてゐる。――青年達の間にさういふ噂が立つて、信市はあくまで村の平和の攪亂者としての立場に立たされる結果となつた。

四

「山田君、寒いのに精が出るな。」

木枯の大根畑にゐた信市は、さういふ聲を聞いて顔をあげた。

畦道に立つてゐたのは、あれ以來姿を見せなかつた木藤彦三郎であつた。

信市はむつつりして、お義理のやうに默つてお辭儀をした。久し振りに木藤

の姿を見たからといつて、別段頼らうとも思はなかつたし、嬉しくも有難くも何ともなかつた。むしろ木藤に騙されてゐたやうな氣がして、嘘つきといふ反感が起るだけだつた。

「我慢しなければいかんぞ。眞面目にさへやつてれば、村の人達はきつと君を赦してくれる。」

何を云つてやがるといふ態度で、信市は默つて鍬を打ちおろした。

「その後君が眞面目に働いてるのを見て、私は安心してるよ。この上ともお母さんに心配をさせないで、確かりやりたまへ。」

それだけを云つて、木藤は村を街道のある方へと出て行つた。

木藤が立ち去ると、信市は始めて鍬の手を休めて後を見送つた。その眼には不快の色が漲つてゐた。

（一體何をしにひよつくり村へやつて來たんだ、わざ〳〵おれの様子を見に來

たのなら、たつたあれだけのことを云つて歸つて行く筈はない。多分、村のあつちこつちで、おれの評判を聞いて廻つたに違ひない。）

信市はもう一度嘘つきめと思つた。

（あんな奴の眼が光つてるから、村の奴等は一層おれを罪人扱ひにするんだ。あの時決心して何處かの都會へ出てゐたら、おれは今頃自由な身になつて、愉しい暮しをしてゐられたらう。）

今日の不幸と孤獨が、木藤の出現によつて始まつたやうに、信市には思はれて來るのであつた。

その夜、母は佛壇の前で食事をしながら、向ひ合つた信市に云つた。

「なあ信、あと十日經てばお父つあんの百ヶ日だが、お葬式の時の世話になつてゐるから、叔父貴と緣者だけは呼ばんといかんだらうな。」

「呼ばんでいゝよ。」

信市は言下に云つた。

「それでもお前。……」

「おれは厭だよ。叔父貴も緣者も、顏を合せたら、借金の催促をしておれを痛めるくらゐが關の山だ。誰が[illegible]れの家なんぞへ、心から法事に來て吳れるものか。おれは誰にも逢はんよ。この家へは、誰にも來て貰ひたくない。」

氣が弱くて、ひたすら世間に氣兼ねばかりして小さくなつてゐる母親は、ただ悲しさうに眼をしよぼ／＼させただけで、默つてしまつた。

その母親の憐れつぽい姿を見てゐると、信市は反抗的に世間への憎惡を募らせた。誰ともつきあひをしないで、この母だけを大切にして、母子二人きりで暮しく行くんだといふ氣が、肚一杯に漲つて行つた。

村には近い親戚としては、唯一人の叔父がゐるきりで、あとは他人も同樣な

遠縁に當る家が五六軒あるばかりだつた。しかもその叔父を始め、多少とも縁に繫がる家には、悉く父の代の借金があつた。

信市は歸村の翌日、村長の家で經驗した冷たさに躓いて、叔父の家へは挨拶に廻らなかつた。叔父の方からも、一度も顏を見せなかつた。その他の遠縁の者とは、遠くから姿を見合つても、互に挨拶ひとつしたことがなかつた。

全然縁のない他人よりも、多少とも縁の端に繫がる者の方が、餘計に信市を憎んでゐるに相違なかつた。事實、親類の顏に泥を塗つたといつて、信市を人非人のやうに罵つてゐる噂が　母親の耳には這入つてゐた。

(交際ふものか、今に見てろ。金を貯めて、借金を叩き返してくれるから——)

信市はさう意地になつて、齒軋りをする思ひであつた。

その二三日後、信市はまたしても野良で、遠くを歩いて行く木藤の姿を見掛けた。どうしたことか、信市の方へは來ずに、外套の背を丸めて歸つて行つた

(また來てやがる。)

吐き出すやうに信市は舌打をした。木藤の姿を見るたびに、お前は破廉恥な罪人だと、むきつけに云はれるやうな氣がした。

信市は働くのが厭になつた。畑の中にゐる自分が、曝しものになつてゐるやうな氣がした。彼は家で繩を綯ふ仕事のあるのを思ひ出して、けふは早く歸らうと、傍の小川で鍬の先を洗つてゐた。

「信市。」

不意に後から呼び掛ける聲があつた。

振返つて見ると、思ひがけない村長の山中新右衞門であつた。

「けふは早仕舞ひかな。」

新右衞門は裾の短い二重廻しを着て、にこにこ笑ひながら近寄つて來た。

「へえ」と云つたが、信市は面喰つて言葉が續かなかつた。

新右衞門は平せい小作人などに言葉をかけるどころか、こちらからお辭儀でもしない限り、見向きもする人ではなかつた。それが向ふから呼びかけたばかりか、にこ〳〵と機嫌の良い笑ひさへも浮べてゐるのを見ては、信市はむしろ氣味が惡かつた。

「なか〳〵眞面目に働いてゐるさうぢやな。さうして一生懸命に働くことが、お前の事を心配しながら死んだ親父への、何よりの供養になる。確かり精を出せよ。」

信市は再び恐縮したやうに「へえ」と云つたが、これが歸村の翌日挨拶に行つた時、冷たい言葉で恥を知れ、と云つた村長と同じ人だらうかと、呆れて顏を見守つた。

しかも新右衞門の溫かい笑顏は、なほ續いてゐた。

「村の者が兎や角云つても、氣にしてはいかんぞ。お前さへ素直にして眞面目

にやつとれば、いづれは解つて來る。わしがついとるから、何も心配することはない。氣にせずに精出してやれよ。」

新右衞門はしんみりとさう云ひ殘して、歸らうとしたが、振り返つて「遊びに來るがいゝぞ」と云つた。

「有難うございます。」

思はず禮を云つて、見送つてゐると、信市の胸は迫つた。

歸つてから、こんな溫かい言葉を聞いたことがあつただらうか。――全身に情が沁みて、躰中が熱くなつたほどの有難さであつた。

しかし暫く經つと、忽ち反動的な寒さが心を襲つて來た。

(――村長が、本心からおれみたいなものに、あんなことを云ふ筈はない。どう考へてもある筈はない。氣紛れにあんなことを云つたんだ。さうでなかつたら何か魂膽があつてのことだ。)

信市は急に警戒する氣になつた。そのまゝ受け取るには、餘りに前後に聯絡(れんらく)のない、夢のやうな話だつた。

歸る途々、信市は狐にでもつままれたやうな氣がして來た。そして却つて用心する氣になると同時に、母親には何も云はないことに心にきめたのであつた。

五

亡父の百ヶ日は珍らしく風のない靜かな日だつた。日が暮れるとしん／＼と寒さが身に沁みて、いよ／＼冬だなと思はせる靜まり返つた村の夜になつた。

信市は父親だけには濟まないと思つた。一生を働き通して死んで行つた父に、何ひとつ喜びを見せてやらなかつたばかりか、最期に見せた親不孝を思ふと、さすがに心が疼(うづ)くやうであつた。

心ばかりの供物をして、母子二人で長い間佛前に坐り通してお詣りをしてゐ

た。すると「御免よ」と云つて這入つて來たのは、思ひがけない叔父の作平だつた。

「あ、叔父さん。――」

「けふは庄さんの百ヶ日だつたな。なぜ知らせてくれんのだ。うつかり忘れるところだつたぢやないか。」

作平はさう云つてつか／＼と上り込むと、いきなり二間切り奧のの間へ通つて、何か携へて來た供物を佛壇に供へながら、鈴を鳴らして拜んだ。

信市は面喰つて叔父の姿を眺めてゐた。すると續いて、叔父と言葉を交はしてゐる暇もなく、遠縁の人達が、次から次へとやつて來た。それらの人々は母親と信市へ氣輕に言葉をかけて、狹い六疊の間へ車座に陣取ると、勝手に亡父の思ひ出話に耽(ふけ)り始めた。

信市は氣持の整理をしてゐる暇も何もなかつた。豫期せぬ大ぜいの來客に、

て來るやうにしなさい。さうすればわしがよいように割つて返してやる。お前もそれさへ拂つてしまへば、親の借金を立派に返したことになつて、親孝行にもなれば、肩身の狹い思ひもせずに濟まう。その換り、お前もこの上とも精出して、わし達親類の者を安心さしてくれんけりやならんが、どうだ信市、そのつもりになつてやつて見るか。」

「はい、有難う存じます。ですが、大きな過ちを犯して、みなさんに御迷惑を掛けた者が、この上そんな御迷惑をかけましては。……」

「いゝや、わし達が好んですることだ。迷惑でも何でもない。わし達は死んだ庄さんが、喜んでくれさへすればいゝのだ。」

するとこの時、默つて聞いてゐた新右衛門が口を挿んだ。

「結構な話ぢやないか。信市。喜んで素直に受けなさい。それが皆さんの御厚意に酬いる道だ。たゞ皆さんが、それ程お前の身を思つて下さるといふことを

いつまでも膽に銘じてをればよい。」

「有難う存じます。それではお言葉に甘えまして、さうさせて頂きます。何んとでもして、來年の春までには、きつとお返しいたします。叔父さんはじめ、皆さん、有難う存じます。厚く御禮申上げます。」

信市が疊に頭を擦りつけるのを見て、誰よりも新右衛門は滿足さうに頷いた。

「禮は、お前の今後の働きで云ひなさい。ところで、親類御一統がさう仰しやるなら、わしも默つて見てゐるわけには行かぬ。わしはこの家をひとつ改築してやらうぢやないか。軒が傾いて、暴風雨でもあれば壞れてしまひさうな家でその上借金があつては、嫁の來手もあるまい。わしが改築して、もう一間建て増しをしてやることにしよう。」

信市は自分の耳を疑つたあんまり思ひ掛けない倖せの續出であつた。

「これは有難うございます」と、信市がうろたへて禮を云ふのに迷つてゐるう

母親と二人でうろ／＼しながら茶の支度をしなければならなかつた。

　しかし、何といつても腑に落ちなかつた。歸村以來、長い間反感を覺えて來たのは、自分だけの僻みだつたのであらうか。——信市は何やら惡夢から覺めでもしたやうな氣がした。

　最後にやつて來た客は、一層信市を啞然とさせた。それは村長の新右衞門と木藤彦三郎とであつた。

「村長さんにまで詣つて頂いて。——勿體ないことで……。」

　母親は三疊の間の隅の方に小さく坐つて、涙を流して禮を云つた。

「かうしてみんな揃つた上に、村長さんや木藤の旦那にまで詣つて頂いて、佛もさぞ喜んでるだらう。なア信市。」

　叔父の作平が云つた。

「はい、思ひがけないことでした。有難う存じます。」

　信市は丁寧に頭を下げた。

「時にな、みんなで相談してみると、お前の家の借金が庄さんの代から積り積つて、二百圓ばかりある。これが何時までもお前に附纏つてゐたんでは、お前も働き甲斐がないだらう。お前はまだ若い身だから、これから一と奮發して貰はにやならんし、たつた一人になつたお母あに安心させて、樂な目を見せてやらなくちやならん。それに兵隊の方もいつお召しがあるか知れんとすると、お前も今のうちに、心殘りのない支度をしておかにやならん。そこでわし達親類の者が寄つて相談をしたのだが、金の方は、それぞれ元金を二割だけ返して貰つて、後は死んだ庄さんの供養にしようといふ事になつた。揃へて二百圓の二割で四十圓だ。けち臭いことを云はずに、そつくり遣つてしまつても良いやうなもんだが、それではお前も氣が濟むまいし、また働くのに勵みもなくなる。それで何日何時までとは云はんから、確り精出して、ぼち／＼わしの家へ持つ

て來るやうにしなさい。さうすればわしがよいように割つて返してやる。お前もそれさへ拂つてしまへば、親の借金を立派に返したことになつて、親孝行にもなれば、肩身の狹い思ひもせずに濟まう。その換り、お前もこの上とも精出して、わし達親類の者を安心さしてくれんけりやならんが、どうだ信市、そのつもりになつてやつて見るか。」

「はい、有難う存じます。ですが、大きな過ちを犯して、みなさんに御迷惑を掛けた者が、この上そんな御迷惑をかけましては。……」

「いゝや、わし達が好んですることだ。迷惑でも何でもない。わし達は死んだ庄さんが、喜んでくれさへすればいゝのだ。」

するとこの時、默つて聞いてゐた新右衞門が口を挿んだ。

「結構な話ぢやないか。信市。喜んで素直に受けなさい。それが皆さんの御厚意に酬いる道だ。たゞ皆さんが、それ程お前の身を思つて下さるといふことを

いつまでも膽に銘じてをればよい。」

「有難う存じます。それではお言葉に甘えまして、さうさせて頂きます。何んとでもして、來年の春までには、きつとお返しいたします。叔父さんはじめ、皆さん、有難う存じます。厚く御禮申上げます。」

信市が疊に頭を擦りつけるのを見て、誰よりも新右衞門は滿足さうに頷いた。

「禮は、お前の今後の働きで云ひなさい。ところで、親類御一統がさう仰しやるなら、わしも默つて見てゐるわけには行かぬ。わしはこの家をひとつ改築してやらうぢやないか。軒が傾いて、暴風雨でもあれば壞れてしまひさうな家でその上借金があつては、嫁の來手もあるまい。わしが改築して、もう一間建て增しをしてやることにしよう。」

信市は自分の耳を疑つたあんまり思ひ掛けない倖せの續出であつた。

「これは有難うございます」と、信市がうろたへて禮を云ふのに迷つてゐるう

ちに、作平が引取つて頭を下げた。
「それがお願ひ出來ますなら、わしらは材料の方のお手傳ひは出來ませんまでも手の空いてる者が、躰でお手傳ひをさして頂きませう、なあみんな。どんなもんだらう。」
「さうとも、この家の改築や建増しくらゐのことなら、わざ／＼大工を賴むことはないわしらの手でやれるんだから、ぜひお手傳ひさして貰はう。」
遠縁の一人がさういふと、みんな異議なく感じた。
「さうですか。親しい目をさせて濟まんが、親類の人々の手で改築が出來るといふことになれば、これ程結構なことはない。その代り材料はいくら要つても心配は掛けんから、充分にやつて頂きたい。」
新右衞門はさう云つてから、今度は信市に向つて云つた。
「信市、今も聞く通りだ。お前は果報者だぞ、それにお前ももう歳だ。友達は

殆んど嫁を貰つてる。お前一人が殘つてるのは口惜しいだらう。改築の金と、借金の返濟が濟んだら、わしが引受けて嫁の世話をしよう。」
「えッ。」
信市はびつくりして新右衞門の顏を仰いだ。しかし僞りや冗談でないことは、新右衞門の眞實な溫かい表情ではつきりと語つてゐた。
見る／＼信市の眼から、熱い淚が溢れて來た。
「私のやうな者に、嫁の來手がありませうか。」
「わしが世話をするのだ。わしに委せておきなさい。」
夢のやうな希ひの數々が、はつきりと事實となつて、塔のやうに積み上げられて行くのであつた。
信市は感激せずにはゐられなかつた。感謝と喜びがはち切れるばかりに溢れて來て、全身がわな／＼と顫へるのを制することが出來なかつた。

彼は遂に泣き伏して、吃り吃り云ひ續けた。

「わたしは、果報者です。……何とお禮を申上げてよいか、……どう御恩返しをしてよいか。わかりません。眞實、生れ代つて御恩返しをいたします。これまでのことは、どうかお赦し下さい……。」

「信市、嬉しいか。」

「はい。」

「今だから云ふが、お前をこんなに倖せにして下さつたのは、こゝにおいでの木藤さんだぞ。木藤さんがお前のために、陰から村中を歩き廻つて、一方ならぬお骨折りをして下さつたのだ。わし達は木藤さんのお話を聞いて、お前をそのまゝにしてはおけなくなつたのだ。木藤さんによくお禮を云ひなさい。」

「…………。」

信市は濡れた顔をあげて木藤を見たが、胸が詰つて容易に言葉が出なかつた。

木藤は滿足さうに、にこ〳〵笑つてゐた。

「山田君、よかつたな、これからは確かりやつて、早く幸福になつてくれよ。」

「有難うございます。御恩は、死んでも忘れません。」

「いや〳〵、私のしたことは、君の將來を心配して下さるお上のお情だ。みなさんの御親切も、お上の御心配の御手傳ひをして下すつてるのだ。一人の青年の生涯を過らせないために、お上ではそれ程心配して下さるといふことを、決して忘れてはならんよ。お上を裏切らないように、これを機會に、立派に更生してくれたまへ。」

「はい。膽に銘じます。」

こう云つて信市は、再び男泣きに泣いた。

三疊の間の片隅では、生れてはじめての倖せにうろたへた母親が、禮を口にしなければならないことさへ忘れ果てゝ、先刻から烈しく咽び入つてゐるので

あつた。

× × ×

その後、野良仕事の他に、溜池の新築工事にも出かけて、信市が更生の日を送つてゐることはいふまでもない。また村の人々が、次第に信市の更生の姿に好意を寄せはじめたことも、わざ〳〵附加へるにはあたるまい。

たゞ司法保護委員の木藤彦三郎が、危く信市が再犯へ轉落するところを喰ひ止めた喜びを村長に語つて、犯罪の防止には、何よりも温かい環境の力が必要であり、よき協力者を得たと感謝してゐることを傳へれば足りるであらう。

著者略歴

慶應大學文學科に學び時事新報文藝部長、帝劇技藝學校主事を經て作家生活。戯曲、小説數多し。

昭和十八年九月三十日印刷 「花あやめ」 承認部數 一〇、〇〇〇
昭和十八年十月 十 日發行 日本出版會承認イ二〇〇一四六號
賣價 二圓三十錢
定價㊙ 二圓二十錢
特別行爲税相當額 十錢

著者 邦枝完二

發行者 山形初太郎 東京都芝區新橋一ノ二四

印刷者 山元正宜 東京都小石川區柳町二九

發行所 白林書房 東京都芝區新橋一ノ二四
電話銀座七三七二番
振替東京一二九七番
日本出版會員一二六〇七四番

配給元 日本出版配給株式會社 東京・神田・淡路町

442
34

終

白林書房刊

賣價2.30